

# 「記憶を紡ぐ晩夏」



文と写真 敷田麻実（野生生物保護学会会長）

夏の終わりは後悔とともにやってくる。もう少し夏休みが長ければ、と悔しい思いをした経験は誰にでもあるだろう。せつかくの出会いが中途半端に終わり、残念に思うこともあるだろう。あれもすればよかった、こうしておけばよかった、そう思った時に胸の奥に残る悔しい思いは、せくようなくつくづくぼうしの鳴き声と重なる。

しかし、できなかったことが必ずしも苦い記憶となるのではない。夏の甘く切ない出会いの記憶も、太陽の光が頼りなげになると美しい記憶に生まれ変わる。それは美化ではなく、記憶の醸成だ。

時間に余裕がある夏は、体験を豊かにする時期である。調査に出かける機会も多い。フィールドでの体験や出会いは、これから先の人生にとってかけがえない財産となるだろう。

だが、効率よく体験することに傾注してはならない。手を休め、フィールドの野草に目を留め、「みちくさ」を試みようではないか。効率の追求は、日常生活の中の携帯電話やメールで十分だ。

人生は美しい思い出で紡がれる。



晩夏の落日（北海道美瑛町）